

平成 30 年度 米・ハワイ短期留学プログラム 感想

E 類 多文化共生コース 2 年生

私は昔から、将来は地元で教員をやりたいと考えていた。私の地元は、近くに工業地帯がある関係で外国人労働者が非常に多い地域である。そのため、私自身も地元の学校に通っていた時は同級生にブラジル人やフィリピン人が多くいた。また、現役の小学校教員である私の母が現在担任する、小学校 3 年生のクラスは、生徒 20 人中 3 人がフィリピン人であり、文化や言語の違いで苦労している話をよく聞く。日本の教育現場に外国人児童が増えていることを、母の話から実感すると共に、そのような“マイノリティー”に分類される子供たちを理解してあげられる教員になりたいと思った。現在所属する多文化共生教育コースを希望したのも、その将来像に近づくには「多様な“文化”が教育現場でどのように“共生”していけるか」を学ぶ必要があると考えたからだ。その問いへのヒントが、多くの人種が共存しているハワイにあるのではないかと思い、今回の研修への参加を決めた。

また、私自身の課題である英語を上達させたかったため、積極的に使うことを目標にしていた。買い物などの日常的な場面はもちろん、学校見学やプレゼン、ホームパーティーなどでも英語を使うべき場面は多くあった。伝えたいことをうまく表現できずに自分の力不足を実感すると共に、ハワイの人たちの自分を受け入れてくれている姿勢から多くのことを学んだ。私がどんなにひどい文法で話しても、意図をくみ取ろうと歩み寄ってくれる感じがした。特にメルさん、リンさんに招いていただいたホームパーティーでは、様々な人と会話をすることができたし、現地の人たちの温かさを感じることもできた。それは、ハワイ独特の文化が混ざり合った状態の中で育った人たちが、互いの文化を否定せず、島の中でうまく共存しようと格闘してきた歴史があるからだと思う。これから教師として様々な文化が混在した教室と向き合う際も、その互いを受け入れる姿勢を子供たちにもってもらえるよう歩み寄ってきたいと思った。一方で、一緒にいる日本人に頼り過ぎてしまったり、観光地であるがゆえに日本語で切り抜けられてしまったりと、反省するべき部分が多々あった。現地の人との深い対話を通して、その地の文化や考えに触れるには、英語スキルの向上が必要不可欠であると感じた。それと同時に、言語はただのコミュニケーションのツールでしかないと言える。基礎知識を十分に持ったうえで、自分の中で相手に伝えたいこと、聞きたいことを明確にかつ高度なレベルにしたいと感じた。

また、デニス小川先生のゼミでプレゼンできたことも、貴重な経験となった。初めてのネイティブの前でのプレゼンで、自分の英語が伝わるか不安だったが、一緒にグループだった先輩方のお借りし、なんとかやり遂げることができた。ここでも、自分の英語力を伸ばし、より議論を発展させることが自分の目指すべき姿だと感じた。

教員になるにあたってのヒントを得たいと思い参加した今回の研修だったが、教員以外の仕事に目を向けるきっかけになったように思う。例えば、ワイアルア小学校の教員には残業がほとんどないという話が自分の中で衝撃だった。日本の学校は残業が多く、ブラックなイメージしかいないため、このような教育現場もあることが意外だったし、狭い世界で完結せずにもっと広い視点で将来を考えていきたいと思

った。また、自分が海外や英語に強いあこがれを抱いていることを改めて実感した。何か明確に達成したいことがあるわけではないが、幼い頃からの「知らない世界の話聞くこと」「新しい世界に飛び込むこと」に惹かれる気持ちを改めて思い出すことができた。そのようなワクワクする気持ちを追求し、自分の将来に繋げれたらベストだと思う。教員になるにしても、自分の外での経験を活かすことができれば、話の説得力が増すし、生徒に対して様々な視点からヒントを与えられるだろう。就活を視野に入れて、将来を改めて考えていきたいと思った。(一部省略)